



# 南郷

札幌市立南郷小学校 学校だより 第6号  
令和6年8月26日

【学校電話】011-861-9305

【学校ホームページ】

<https://www.nango-e.sapporo-c.ed.jp/>

## 「恩」たくさんの「しあわせの花」が咲く2学期に

～気付くこと、知ることによって幸せが増えていく～

校長 関根 治彦

普段はどうしても車を使って移動してしまうのですが、夏休み中、ある会議に出席するために地下鉄に乗りました。すすきのにあった小学校に勤務していたときは、公共交通を使い通勤していたのですが、その中では文庫本を読む人、寝ている人、目を閉じて音楽を聴く人、雑誌を読んでいる人など様々でした。しかし、現在は皆が一様にスマホを操作しています。その風景の変化にとっても驚きましたが、気が付いてみると、隙間の時間があるとき私自身もスマホをいじっていることに気が付きました。この長期休業中には意識して読書をするようにしようと、これまでの学校だよりで幾度かお話しした退職された校長先生からいただいた「関根よ。ここを読むべき」文庫（自分で勝手に命名しています）から手に取ったのが木村 耕一 編著 『親のこころ』でした。

「君は今まで、親の体を洗ったことがあるかね」

ある青年が、一流企業の入社試験で、社長からこんな質問を受けました。

「いいえ、一度もありません」と答えると、社長は意外なことを言ったのです。

「君、すまないが明日のこの時間にここへきてくれないか。それまでに親の体を洗ってきてほしいのだが、できるか」

「はい。何でもないことです」と、青年は答えて家に帰りました。父親は彼が幼い時に亡くなりました。母親は、一人で必死に働いて子どもを大学まで出させたのです。彼は、『お母さんが呉服の行商から帰ったら、足を洗ってあげよう』と思い、たらいに水を汲んで待っていました。帰宅した母親は、「足ぐらい自分で洗うよ」と言います。事情を話すと、「そんなら洗ってもらおうか」と、縁側に腰をおろしました。

「さあ、ここに足を入れて」と、青年はたらいを持ってきます。母親は、言われるとおりにしていました。彼は左手で、母親の足を握りました。しかし、洗うはずの右手が動きません。そのまま両手で母親の足にすがりつき、声をあげて泣いてしまったのです。

『お母さんの足が、こんなに硬くなっている……。棒のようになっている……。学生時代に毎月送ってもらっていたお金を“当たり前”のように使っていたが、これほど苦勞をかけていたとは……。』と知らされ、泣かずにおれなかったのです。

翌日、青年は社長に、

「私はこの会社を受験したおかげで、どの学校でも教えてくれなかった親の『恩』ということを知らせてもらいました。ありがとうございました」

とうれしそうに言ったそうです。（後略）

最近、人と人のかかわりが希薄になり、自分の思いや考えを主張することが多くなる一方、『恩を感じる力』などが失われつつあると言われます。しかし、学校評議員会やスクールゾーン実行委員会や評議員さんや通学パトロールのみなさんなど子どもたちがお世話になっている方々とお話しをすると、南郷小学校の子どもたちが、地域の方や保護者の方々の『恩（やさしい心、親切な心、思いやりの心）』などに温かく支えられていることに改めて気付かされ、感謝の気持ちで胸がいっぱいになります。これらの思いが子どもたちに伝わってほしいと思う反面、自分たちで感じ取れる人に育ってほしいと思ってしまう。

今日から2学期がスタートします。南郷小学校では今年度、「つなげる子 認め合う子」を目指し様々な取組を行っております（詳しくは学校ホームページの「令和6年度の南郷小学校の教育」の動画をご覧ください）。職員一同、目指す子ども像の実現を通して『恩を感じる』ことで、たくさんの“しあわせの花”が咲く2学期になるように力を合わせ、心を合わせ、全力で取組を進めてまいります。よろしくお願いたします。